

初冬の飛鳥を歩く

12月1日、筆者が担当する秋学期の授業「文化遺産と保存の活用」(2年次生)、「日本考古学の歩み」(1年次生)の現地研修として、受講生たちと初冬の飛鳥を散策した。明日香村内に点在する遺跡や寺社などを見学し、飛鳥時代の考古学について理解を深めると同時に、村内の文化遺産と歴史的景観がどのように保護され、活用されているのかを現地で学ぶことが目的だ。これまでの場合と同様に、今年度も、受講生(2年次生)が分担して作成した冊子を持参し、担当者が各地点で解説を行うことにした。当日は近鉄飛鳥駅に午前10時集合。駅の周辺は、飛鳥時代(6世紀末～7世紀)になって築かれた「終末期古墳」が集中する場所だ。

最初に訪れた国史跡・岩屋山古墳の横穴式石室は、花崗岩の切石で構築した「岩屋山式石室」(7世紀前半)の典型例として知られている。古墳の墳丘は民家に囲まれているが、石室の入り口には説明板が設置され、訪問者が自由に見学できる環境が整っている。一方、次の目的地、梅山古墳は、明日香村に所在する唯一の前方後円墳だが、欽明天皇の「檜隈坂合陵」として宮内庁が管理しているので、濠の外側から墳丘を遠望することしか許されない。すぐ近くにある吉備姫王の「檜隈墓」も同様で、宮内庁が設置した境界杭を挟み、墓前に並ぶ猿石を見ることができる。猿石は飛鳥に数多い謎の石造物の一つだが、野道(遊歩道)を少し歩いた山際にある「鬼の俎」「鬼の雪隠」も、鬼にまつわる謎めいた伝説で知られている。しかし、こちらはすっかり謎が解け、終末期古墳の埋葬施設の種類、「横口式石槨」の底石と蓋だと判明している。「鬼の雪隠」から田んぼの向こうに見える野口王墓山古墳も墳丘が八角形をした著名な終末期古墳だが、天武・持統天皇陵として宮内庁が管理していて、やはり自由な見学ができない。この古墳に関しては、鎌倉時代の盗掘記録(1235年)と、『日本書紀』『続日本紀』などの記述と状況が合致し、被葬者が確定したほとんど唯一の天皇陵古墳だということ、筆者が説明した。

いかにも明日香村らしい田園風景の中を北へしばらく歩くと、自動車が行き交う二車線の舗装道路が現れる。その道路をわたり、坂道をあがった丘陵上にある国史跡・菖蒲池古墳は7世紀中頃に築かれた方墳で、横穴式石室に二基の家形石棺が設置されている。ただし、危険防止のため、石室の入り口には鍵がかけられている。気をつけて周囲を眺めると、この古墳がちょうど明日香村と橿原市の境界近くにあることがすぐにわかる。古墳の墳丘そのものは橿原市の市域に位置し、古墳の西側には丘陵を削って開発された新興住宅がびっしりと建ち並んでいる。これに対して、古墳から東側、明日香村は景観が一変し、落ち着いたたたずまいの家屋が田園風景のなかに点在するばかりなのだ。授業で事前に学んだとおり、明日香村は、いわゆる「古都保存法」によって村の全域が「歴史的風土特別保存地区」として開発が厳しく規制されていることが一目瞭然と理解される。

車道沿いのコンビニに立ち寄った後、遊歩道を歩いて亀石を見学し、橘寺境内の休憩所で昼食休憩。橘寺の境内は国史跡、堂内のいくつかの仏像は重要文化財に指定されている。道路を

はさんだ国史跡・川原寺跡は、現地に足を運ぶ余裕がなく、遠望しながら解説を聞く。橘寺から石舞台古墳まで、山沿いの野道をひたすら歩き、溪流(飛鳥川)を渡ると、視界が開け、国営飛鳥歴史公園石舞台地区と記した石碑が目に入る。特別史跡・石舞台古墳は、言うまでもなく飛鳥観光の目玉の一つで、その周辺一帯が国営公園として整備され、一般に公開されているのだ。駐車場や売店など、観光客向けの施設が設置され、賑わっている様子が窺える。石舞台古墳からは車道を歩き、集落内の古い町並みが残る空間を通り過ぎる。少し寄り道になるが、明日香村役場に立ち寄り、作成した資料集を職員に届ける。天理大学と明日香村は、2014年、相互連携に関する協定を締結していて、明日香村の文化遺産を大学の教育に活用する今回の現地研修は、まさにその趣旨に沿っている。

世界遺産「飛鳥・藤原」



写真 横断幕が掲げられた明日香村役場

役場に立ち寄ったもう一つの理由は、受講生たちに、建物に掲げられた横断幕「飛鳥・藤原を世界遺産に!」を見てもらうためだ。2006年、文化庁は、世界遺産の暫定リストに記載された案件が4件しかないことを理由に、世界遺産の候補を、全国の自治体に公募した。全国から24件の応募があり、明日香村も、桜井市・橿原市・奈良県と共同で、「飛鳥・藤原—古代日本の宮都と遺跡群」を世界遺産暫定リストへの追加記載候補として提案したところ、その提案が認められ、翌2007年1月、国の推薦によって正式にリストに記載されたのだ。自治体からの世界遺産候補の募集は、翌年まで続き、全国から多くの名乗りがあがったが、候補の中から選択され、暫定リストに記載された案件の中から、現在は、毎年順番に、政府が正式な推薦を行い、世界遺産委員会における審査の結果が報道を賑わせているのだ。従来、各国からの推薦は、文化遺産1件、自然遺産1件が認められていたのが、昨年より厳しくなり、各国1件のみになった。今年は、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が審査を経て世界遺産に登録され、来年は、大阪府の百舌鳥・古市古墳群が推薦される予定になっている。その次は、「北海道・北東北の縄文遺跡群」の順番のはずだったが、延期勧告がなされた「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」の再挑戦を先に行うことになった。「飛鳥・藤原」の場合は課題もあり、順番待ちの状況がまだしばらく続きそうだ。